

平和な笑顔とおびえた私

大貫 芙久美さん（昭和12年生まれ）

昭和19年4月、私が匝瑳国民学校（現在の八日市場市）に入学した時は戦争の真最中でした。父は他の学校の教師でしたが、母は私の通う小学校の教師でした。

登校すると「天皇陛下の御真影」と呼んでいた、校舎の前にある建物にみんなで深くお辞儀します。敵の飛行機がいつ攻めてきて空襲になるかわからないので、朝学校へ行ってもランドセルの中にお道具は入れたままでした。アイウエオを教わっていると、突然サイレンがウーウーウーと鳴ります。

「それ、敵の飛行機が来たぞ。早くしないと爆弾を落とされるよ。」と先生に言われて、みんな大急ぎでランドセルをしょって防空頭巾をかぶって、うす暗い防空壕に押し合いながらかくれました。1時間位かくれていて敵の飛行機が去ってしまうと、また教室で勉強します。するとまたサイレンがウーウーウーと鳴ります。「それ、かくれろー。」とばかり、また防空壕へ・・・というぐあい、落ちていて勉強などできませんでした。

防空壕に逃げる時、敵の飛行機が火を吹きながら落ちて行くのが見えました。その時、子ども心に「あの中の人、どうなったろう。」と心配したのを覚えています。

お昼は、今のようにおいしい給食などありません。ごはんのまん中に赤い梅干しがちょこんと一つの”日の丸弁当”です。それにのりの佃煮か卵焼きが入っていたら最高です。母は、「こんな日の丸弁当ばかりを毎日食べていたのでは、受け持ちの子ども達も栄養失調になって大きくなれないな。」と心配して、手作りのおやつを作りました。そして受け持ちの教室の後ろに紙の袋に入れて下げておき、子ども達が休み時間に自由にとって食べられるようにしていました。私は、放課後母の受け持ちの5年生の教室へ行って、大きなお兄ちゃんお姉ちゃん達とそれを食べるのがとても楽しみでした。“どんなおいしいおやつか”って？何とそれは、卵のからをきれいに洗ってこんがり焼いて、ごま、にぼし、ぬかをかきくいてまぜてすり鉢ですったもので、ふりかけのようなものだったのです。今ではとても食べる気にはなれませんが、でもカルシウムなど栄養たっぷり、そのせいか私も虫歯など1本もできませんでした。

今の3年生の国語の教科書に出ている“お母さんの紙びな”で、「戦争中は、お芋のつるも食べていました。」とありますが、当時私にはとってもおいしかったので、学校でこの教材を教えた時、葉につづいている柔らかい茎を油いためにして、受け持ちの子ども達に味見をさせました。「先生、とてもおいしいよ。もっとちょうだい。」と大よろこび。今でも食べればおいしいものがあるんですね。

着る物では、母の編んでくれたセーターですが、ふかふかの毛糸で編んだものではありません。いらぬ布を3センチ幅位にさいて、それをひものように細くして、それで編んだものです。ですからとても重くて肩がこりそうでした。でも母の気持ちがこもっていて、とても暖かかったのを覚えています。

そのうちに、戦争が終わりました。

ある日、恐ろしい事が起こりました。私は、学校が終わってみんなが帰っても、母といっしょに帰りたいので一人で学校に残っていました。突然学校に、ブーツとすごいスピードで砂けむりをあげて、アメリカ人3人が乗ったジープが乗りこんで来ました。“アメリカ人に会ったら、必ず殺さ

れる”といつも聞かされていましてから、私は、「あ、もうだめだ殺される。」と思いました。私はもうビックリ。急いで木製の教卓（三方が板でかこわれている）の中にかくれました。そして、こう考えました。「殺されるとすれば、先生でここにいるお母さんもいっしょだな。だったら殺されてもいいや・・・」と。私は度胸を決めて、ソーッと教卓の中からぬけ出してしまいました。そして、私は、とつても背の高いアメリカ人3人と校長先生のあとをついて2階へ。アメリカ人の1人が、剣道の絵を指さし、校長先生に強い口調で何か言っていました。

やがて外国人は、2階を一まわりして帰ってしまいました。私は、「誰も殺されないで良かったなあ。」と心から思いながら、ジープを見送りました。

今、成田市では、学校へ外国人講師を招いています。

「マイネームイズ、〇〇〇〇・〇〇〇。」等と言って、〇〇〇さんと喜々として握手をしている子ども達。同じ小学校2年生で、同じ外国人に接しているのに・・・。約80年前、「殺される」と教卓の中でおびえた私と、何という大きな違いでしょう。－笑顔と恐怖－。

今の、この子ども達の幸せが、いつまでも続きますよう祈りながら、ペンを置きます。

(原文のまま掲載しています)